

徳永さん、お疲れさまでした

0106E

徳永さん、お疲れさまでした

久保田 篤

今年もはや夏となり、自宅近くの鴨川河畔の桜の木にも青葉が茂っていきます。今年の春も、各地で満開の桜が我々の目を楽しませてくれました。しかし、そのお満開の桜を見ることなく、徳永さん、あなたは逝ってしまわれました。

私と徳永さんとの出会いは、ちょうど十年前、私が当大阪工業英語研究会に入会した時に遡ります。爾来、徳永さんは、お体の続く限りセミナーに出席なされ、いつも最前列の席で熱心に講義に耳を傾けていらっしゃいました。直接に言葉を交わしたことはさほど多くなかったものの、課題の答案や時々質問、解説から得るところが少なくありませんでした。しかしそれ以上に、その真摯な姿勢自体が、特に私のような若輩に対する、叱咤激励のように感じられました。

当会では何年かに一回、セミナーの講義要録の冊子を発行していますが、それも最新のものまで徳永さんの、それも手書きによるもので、それを見るたびに、工業英語にかけられた情熱の深さに思いを致したものでした。訃報を聞いた時に、あの講義要録がもう作って頂けない、そう思うと、寂しさで感情を感情を禁じ得ませんでした。

もう一つ、徳永さんの晩年の貢献で忘れてならないのは、今まで、二度にわたって配布頂いた、「キーワード」という某新聞の囲み記事の切り抜き集でした。後に某雑誌上で、この記事に高い評価が与えられて

いるのを知り、改めて徳永さんのお目の高さ、我々に対する、そして工業英語に対する愛情の深さに感服致しました。

葬儀での水上先生の弔辞で、徳永さんが本会の設立に多大な貢献をなされたことを改めて知りました。徳永さんは最後まで、本会の、ひいては日本の工業英語の興隆に尽力なさいました。それを思うと、お元気なうちに、肩の荷を降ろしてあげることが出来なかったのが心残りという気もします。

中国の古典に、「年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず」という言葉があります。葬儀の帰途の電車の窓から、ちらほら咲きかけた桜を目にした時ほど、この言葉の意味を深くかみしめたことはありませんでした。

徳永さん、長い間ほんとうにお疲れさまでした。これからは、どうか彼岸でゆっくりとお休みにしてください。